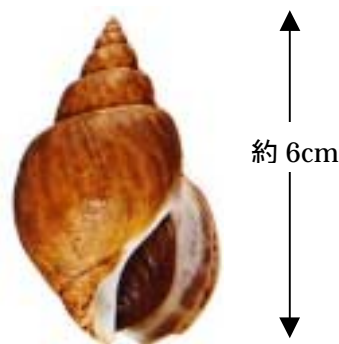


トビウオ通信 (11月号)

<http://www2.pref.shimane.jp/suisi/> (TEL 0855 22 1720)

《バイ漁業の実態調査から》

昔、バイといえば、どのバイ貝の缶詰にも描かれていたように、バイ(地方名:灘バイ)が最もポピュラーで、砂浜や漁港の隅にはこの貝の殻がゴロゴロ転がっていたものです。このバイも近年では漁獲が減少し、すっかり幻の貝になってしまいました。今月はこのバイ資源の現状を把握するため水産試験場が行った調査の結果について、その概要を報告します。



バイ(灘バイ)

聞き取り調査と試験操業結果

昨年、県内の各漁協を対象にバイについての聞き取り調査を実施しました。十数年前には県内の 18 もの漁協で漁獲されていましたが、今では、水揚げがあるのはわずかに江津、益田市の 2 漁協だけになってしまいました。その他の漁協では“ 2~3 年前までは漁獲があった ”、または“ 年に 1~2 回、1kg 程度の水揚げがある ”といった状況です。また、恵曇、大社町、西郷、浦郷の各漁協管内のように、過去にまとまった漁獲があったにもかかわらず、現在は漁獲が全く無い地域があることも分かりました。

これらの地域では既にバイを漁獲する漁業者がいなくなっており、実状を把握するため、水産試験場では過去に漁獲の実績のあった恵曇沖において試験操業を行いました。結果は全く漁獲することができませんでした。その他の海域では試験操業を行っていないので明確には言えませんが、恵曇沖とほぼ似たような状況にあり、バイが殆どいなくなっているものと想像されます。

バイが減少した原因の一つとして、有機スズの影響が指摘されています。かつて有機スズは船底塗料や漁網の防汚剤として大量に使用されていましたが、海中に溶け出した有機スズが海を汚染し、その影響でバイの雌が雄化(インポセックス)して卵を産まなくなってしまうというものです。鹿島分場でも以前バイの種苗生産試験を実施する際に、管内の漁協から親貝として購入した雌の総ての個体で雄化が認められ、採卵が殆どできなかったということがありました。

(インポセックス:雌が成長するにつれ、雄の生殖器ができる現象)

江津・益田の状況は?

一方、現在でもバイの水揚げのある江津、益田市の各漁協管内では少し状況が異なるようです。平成 12~13 年に江津漁協、益田市漁協でバイの性別調査を実施した結果を表 1 に示します。両漁協ともバイの雌雄比はほぼ 1:1 であり、雄化した雌個体についても益田市漁協でわずか 1 個体が確認されただけでした。

表 1 バイの性別調査結果

	雄	雄化した雌	雌	不明 ^{*1}	計
平成 12 年 9 月 江津漁協	106	0	101	22	229
平成 13 年 9 月 江津漁協	96	0	90	78	264
平成 13 年 4 月 益田市漁協	74	1	58	29	162

^{*1}: 小型個体は雌雄不明の個体が大半を占めた

次に、調査で得られたバイの殻長組成を図1に示します。これによると、江津漁協では平成12～13年の調査とも30、45、60mm、益田市漁協では35、55、65mm前後のところにモード（山）が見られます。これらは殻長差からみてそれぞれ異なる年級群であることが考えられます。このことから、江津漁協、益田市漁協の地先では毎年産卵、発生が繰り返えされ、資源として確実に加入していることが伺えます。

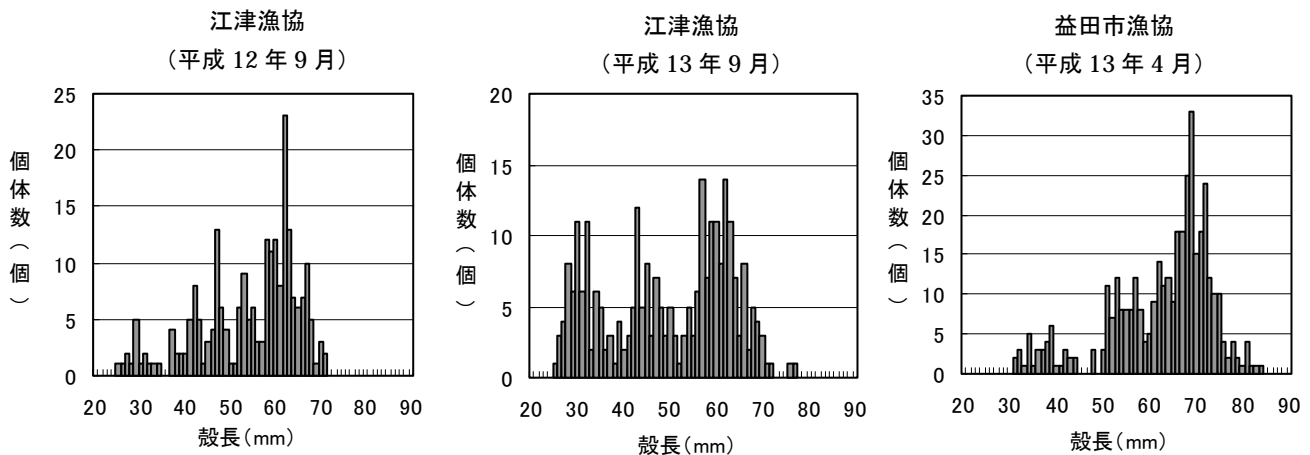


図1 バイの殻長組成

図2に益田市漁協におけるバイの漁獲量を示しました。益田市漁協では平成3年に2,800kgの漁獲がありましたが、その後、平成5～7年には約200kgと1/10以下に減少しました。以前、益田市漁協では、バイの漁獲が減少した際に何年か禁漁にしたところ漁獲量が回復した事例があり、これにならって平成8年から3年間禁漁とした後、平成11年に漁獲を再開しました。その結果、翌年の平成12年には再び2,000kg以上の漁獲がありました。

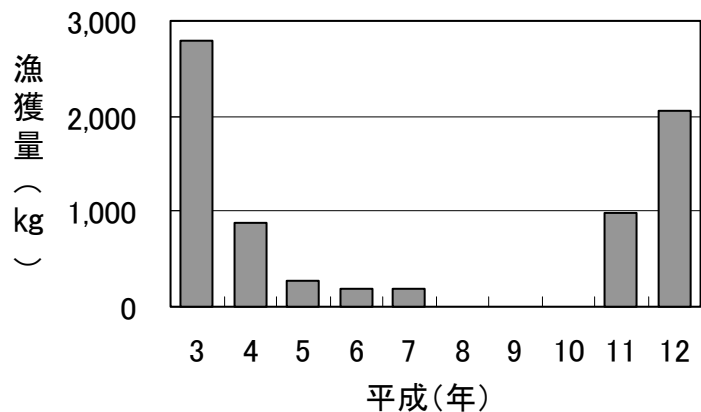


図2 益田市漁協におけるバイの漁獲量

今後の展開

同じ県内であっても場所によってバイの生息状況は異なっているようです。今後、バイ資源を有効に活用するためには、江津、益田市漁協管内のように雌の雄化がほとんど認められない地域では、まず資源診断により適正な漁獲量を定め、それに見合った漁獲を行ない安定的に漁業を継続させて行くことが必要です。また、日本では有機スズを含む船底塗料は現在使用禁止になっていますが、海底に残留していたり、海外から入港する船に使用されていることも考えられるため、バイがいなくなってしまった惠曇のような地域では、まず環境調査を行ない、有機スズの影響がどの程度残っているかを把握する必要があります。その結果、バイに対する影響が認められないと判断された場合には、移植放流や種苗放流などの導入が資源回復の有効手段になるものと思われます。

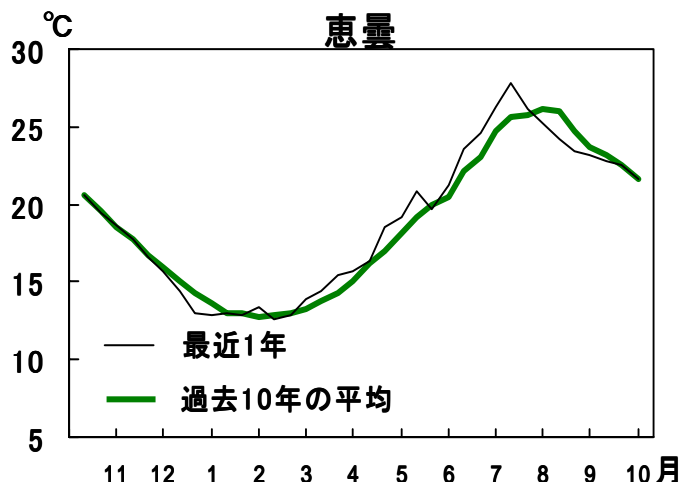
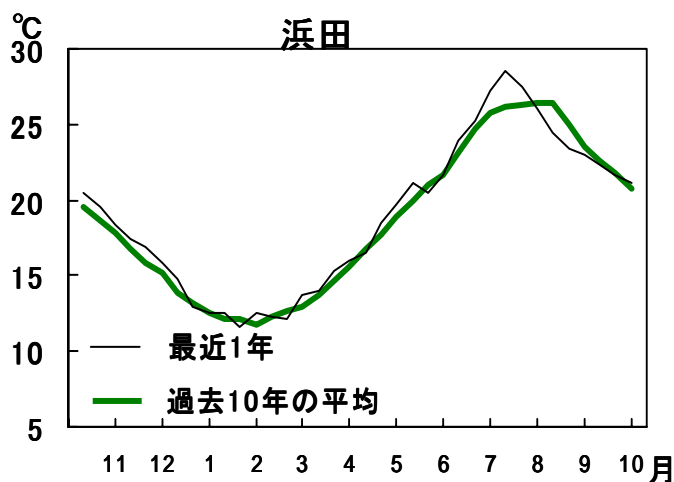
水産試験場では今後さらに調査を行ない、バイ資源復活の可能性について検討して行きたいと考えております。

(鹿島浅海分場 清川 智之)

《 10月の海況 》

10月	月平均	平年差	評価
浜田	21.7	+0.1	平年並み
恵曇	22.3	-0.1	平年並み

10月の月平均水温は9月に比べ浜田で1.9、恵曇では1.3下降しました。浜田、恵曇とも「平年並み」の水温経過となりました。



島根・山口・鳥取の各県水産試験場が行った海洋観測結果(11月上旬)によると、表層の水温は沿岸から沖合いにかけて18~23となっております。

中層および底層(50mおよび100m)では、隠岐諸島の北西約80マイルに勢力の強い冷水域がみられます。この冷水域は10月にも確認されていますが、この時と比べるとやや北に位置を移しています。この冷水域の北方への移動傾向は9月から続いています。また、浜田の北西約70マイルの底層にも冷水域がみられます。これら冷水域の周辺の中・底層では等温線に沿った強い流れが観測されています。

山陰沿岸海域の水温は、表層では山口県の沖合い域で「平年並み」のほかは「やや高め~かなり高め」。中層および底層では、冷水域とその周辺で「平年並み~かなり低め」となっている他は「やや高め~かなり高め」となっています。

《 10月の漁況 》

【中型まき網漁業】

浜田港の中型まき網の総漁獲量はカタクチイワシ、サワラ主体に1,826トン、水揚金額は9,812万円でした。また、1統当たりの漁獲量は457トンで前年の約2倍、平年の101%と、前年を大きく上回りました。水揚金額は2,453万円(前年比:119%)で前年をやや上回っています。恵曇では、マアジ、マサバ主体に総漁獲量124トン、水揚金額は3,139万円でした。1統当たりの漁獲量は21トン(前年比:22%)、水揚金額は523万円(前年比59%)でした。浦郷ではウルメイワシ、ブリ、マアジ主体に総漁獲量999トン、水揚金額1億4,284万円でした。1統当たりの漁獲量は250トン(前年比:44%)、水揚金額は3,571万円(前年比:105%)でした。県西部でカタクチイワシが好調となっています。

【イカ釣り漁業】

浜田港に水揚げするイカ釣り船(5トン以上)によるイカ類の漁獲量は、スルメイカ・ケンサキイカを中心に18.1トン(前年比:37%)と極めて低調な水揚げとなりました。スルメイカは20~25入り、ケンサキイカは2.5段~3.5段がそれぞれ主体でした。一方、西郷のイカ釣り船(5トン以上)では、ソデイカ・スルメイカを中心に80.4トン(前年比:81%)の水揚げで、こちらは前年をやや下回りました。浜田、西郷ともにケンサキイカが不漁となっています。

【沖合底びき網漁業】

浜田港の沖底の漁獲量は335トン、水揚げ金額は1億9,081万円、1統当たりの漁獲量は55.9トン/統

(前年比：84%、平年比：105%)、水揚げ金額は3,180万円/統(前年比：113%、平年比：140%)でした。漁の主体はムシガレイ(前年比：127%)、アナゴ類(前年比：191%)、ヤナギムシガレイ(前年比：174%)となっています。

恵曇港の沖底の漁獲量は217トン、水揚げ金額は1億3,592万円、1統当り漁獲量は54.2トン/統(前年比：120%、平年比：94%)、水揚げ金額は3,398万円/統(前年比：132%、平年比：112%)でした。漁の主体はヤナギムシガレイ(前年比：162%)、アナゴ類(前年比：95%)、アンコウ(前年比：94%)となっています。

【小型底びき網漁業】

大田市・和江漁協とも10月の1航海当り漁獲量は前年を7~9%下回りましたが、水揚金額は5%上回りました。両漁協とも昨年秋にまとまった水揚げのあったアカムツが大きく減少し、イカ類(ケンサキイカ、ヤリイカ)も低調に推移しています。一方、大田市漁協ではソウハチ、キダイ、アナゴ・ハモ類で、和江漁協ではソウハチ、ヤナギムシガレイ、アナゴ・ハモ類、ムシガレイで前年を上回る水揚げがありました。

【定置網漁業】

隠岐地区ではマアジ、ブリ、マサバ、ソウダガツオ主体に、前年並みとなりました。県東部では、ソウダガツオ、マサバ、シイラ主体に前年並みの漁獲がありました。県西部ではマサバ、ソウダガツオ、マアジ主体に前年の84%の漁獲量でした。県全体では前年の8割程度の量となり、マサバ、ソウダガツオ、シイラ、チダイなどが好調な魚種となっています。前月に続きマサバ(豆サバ)が好調です。ブリは0歳魚の分布が日本海北部に偏り、前月に比べ減少しています。ケンサキイカ、クロマグロは低調に推移しています。

【釣・縄】

沿岸の釣・縄は海域間差が大きく、全体的には平年をやや下回る漁模様となっていますが、8、9月の低調期を脱し、水温の低下に伴って回復の兆しが見られようです。

県西部ではヒラマサ、ブリ、サワラ類を主体に量・金額ともに平年を10~30%下回りました。県西部ではサワラ類、アオリイカ、ケンサキイカが主体で、量は平年を約10%下回ったものの、金額はやや上回りました。隠岐はソデイカが好調でしたが全般的にはやや低調で、量・金額ともに平年を20%前後下回っています。

漁獲統計

平成13年10月1日~31日

漁業種類	水揚港	延隻数・統数	主要魚種	1隻(統)1航海当漁獲量	総漁獲量
中型まき網	浜田	43	カタクチイワシ・サワラ	42ト	1,826ト
	恵曇	64	マアジ・マサバ	2ト	124ト
	浦郷	64	ウルメイワシ・ブリ・マアジ	16ト	999ト
イカ釣り (5トン以上)	浜田	276	スルメイカ・ケンサキイカ	66Kg	18.1ト
	西郷	361	ソデイカ・スルメイカ	223Kg	80.4ト
沖合底びき網	浜田	34	ムシガレイ・アナゴ類・ヤナギムシガレイ	9.9ト	335ト
	恵曇	43	ヤナギムシガレイ・アナゴ類・アンコウ	5.0ト	217ト
小型底びき網	和江	393	キダイ・アンコウ	619Kg	243ト
	大田市	348	ソウハチ・ニギス	494Kg	172ト
定置網	浜田	85	マアジ・マサバ・ソウダガツオ	1,733kg	147.3ト
	恵曇	87	ソウダガツオ・マサバ・マアジ	459kg	40ト
	浦郷	49	マアジ・マサバ・ソウダガツオ	767kg	37.6ト
釣・縄	浜田	374	ヒラマサ、ブリ、サワラ類	56.7kg	21.2ト
	五十猛	153	ブリ、ヒラマサ、メダイ	56.9kg	8.7ト

1隻(統)1航海当漁獲量は総漁獲量/延隻数・統数で算出しており四捨五入した値です。